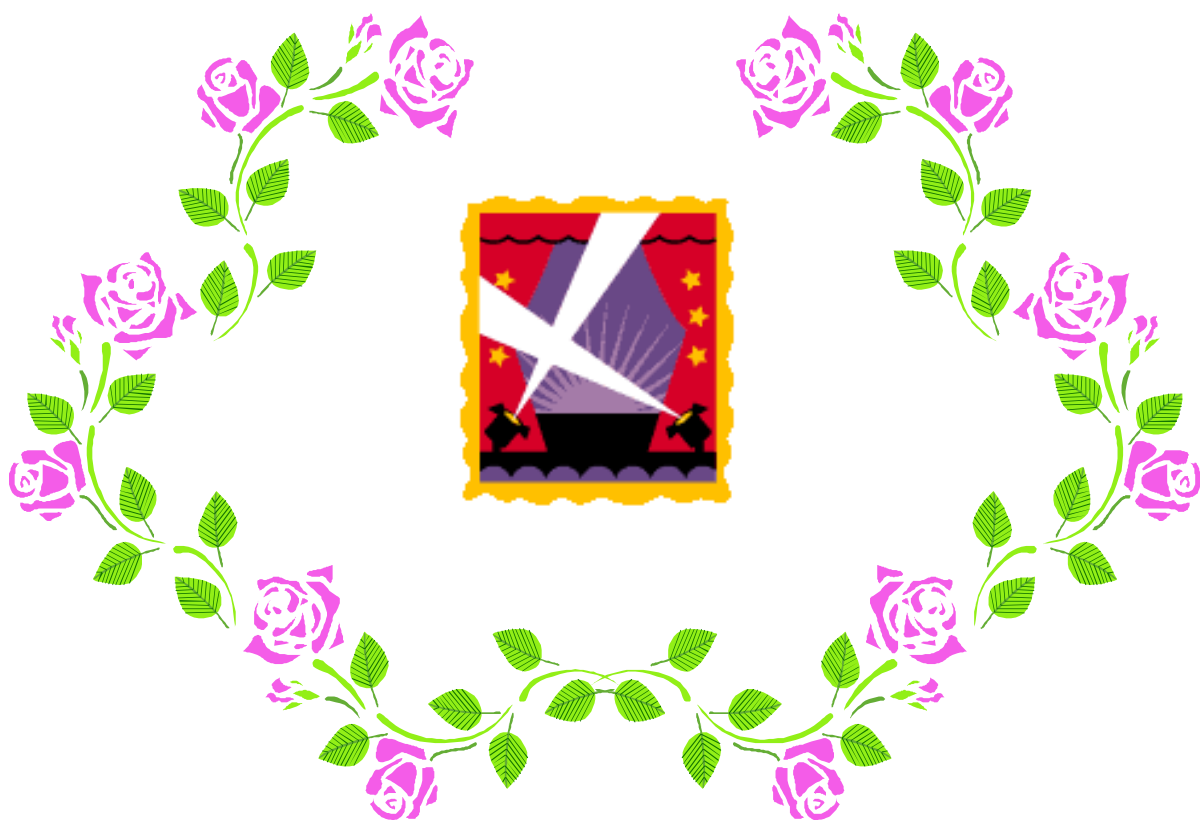


宝塚歌劇100周年 —清く正しく美しく— 展



展示期間 平成26年5月16日～7月16日

大阪市立中央図書館

地下1階文学コーナー 図書展示

平成26年(2014年)は、宝塚歌劇創立100周年にあたります。
それを記念して、宝塚歌劇の歴史や魅力などがわかる図書を集めて、
展示・貸出しています。華やかな宝塚歌劇の魅力をお楽しみください。



宝塚歌劇団 たからづかかけきだん

日本の代表的な女性だけの歌劇団。兵庫県宝塚市に本拠を置く。箕面(みのお)有馬電気軌道(現阪急電鉄)が開発した遊園地の中の宝塚新温泉に、1913年(大正2)7月、湯客向けのアトラクションとしてつくった宝塚唱歌隊がその前身で、これは当時東京の三越(みつこし)デパートにあった少年音楽隊に倣ったものであった。同年12月に唱歌隊の名を廃し宝塚少女歌劇養成会として発足、翌年4月室内プールを改造したパラダイス劇場で「宝塚少女歌劇」第1回公演として歌劇『ドンブラコ』ほかを上演した。その後、大阪、神戸にも出張公演を行い、1918年(大正7)5月には東上して帝国劇場でも公演、成功を収めた。同年12月、従来の養成会にかえて宝塚音楽歌劇学校を発足させ、寄宿舎制をとったが、生徒たちの緑の袴(はかま)姿は全国の少女たちのあこがれの的となった。また生徒数の増加に伴い21年には花組と月組が、さらに24年宝塚大劇場竣工(しゅんこう)を機に雪組が生まれた(星組は33年、宙組(そらぐみ)は98年に発足)。

初期のスタッフには小林一三はじめ久松一声(いっせい)、坪内士行(しこう)、榎茂都陸平(うめもと)りくへい)らがいたが、のち岸田辰弥(たつや)、白井鉄造らが台頭、ことに1927年(昭和2)フランスより新帰朝の岸田作・演出によるレビュー『モン・パリ』は未曾有(みぞう)の成功を収め、わが国における本格的レビューの先鞭(せんべん)をつけた。続いて白井の『パリゼット』(1930)、『花詩集』(1933)がそれぞれ好評を得、とくに『パリゼット』の挿入歌「すみれの花咲く頃(ころ)」はあまねく人口に膾炙(かいしゃ)し、熱狂的宝塚ファンも生まれた。また34年には東京・日比谷(ひびや)に東京宝塚劇場が建設され、東京公演の砦(とりで)となった。40年に「少女」を外して宝塚歌劇団としたが、戦時色が強まるにつれ活動は制限され、もっぱら工場や軍の慰問に駆り出された。天津乙女(あまつおとめ)、小夜(さよ)福子、葦原邦子(あしはらくにこ)、春日野八千代(かすがのやちよ)らがこのころまでのスターである。

第二次世界大戦後は菊田一夫(かずお)、長谷川(はせがわ)一夫など劇団外からもスタッフを招き、またブロードウェイ・ミュージカルに挑戦するなど新路線も示した。その間、『ベルサイユのばら』(1974)、『風と共に去りぬ』(1977)などがヒット、越路吹雪(こしじふぶき)、淀(よど)かほる、上月晃(こうづきのぼる)、汀(みぎわ)夏子、鳳蘭(おおとりらん)、大地真央(だいちまお)、黒木瞳(ひとみ)、一路真輝(いちろまき)、純名里沙(じゅんなりさ)ら多くのスターが生まれた。松竹歌劇団など他のレビューが不振ななか、名実ともに日本を代表する歌劇団として創立以来のモットー「清く正しく美しく」を掲げ、活動を続けている。映画界など他の分野で活躍している出身者も多い。

<商用データベースジャパンナレッジ「日本大百科全書(ニッポニカ)」>より(参照 2014-05-23)